

がん治療になくならない病理診断



臨床検査科部長
吉田 恭太郎

臨床検査科は多数の部門にわかれています。いずれの部門においても、最新の検査機器を導入し、迅速で正確な検査を目指してきました。その中で唯一遅れていたのが病理検査部門です。古典的なやり方で検体を処理し、標本の作製をおこない、診断、報告がなされていたのです。それがここ3年ほどの間に最新機器を次々と導入することによって、最先端の検査部門に生まれ変わりました。

がん治療のためには、正確な病理診断が必要になりますが、それをサポートする体制が整ってきたのです。

スタートは、2006年5月の病理検査システムの導入です。昔ながらの紙伝票で検体を受け付けて、紙の報告書で返却していたのが、すべてコンピューターの画面上でやり取りできるようになったのです。検査のオーダーがたってから、受け付け、検体処理し、報告書を作成するまで、すべてバーコードで管理することにより、検体の取り違えがなくなりました。また検体を提出してから報告書を受け取るまでの時間が格段に短くなりました。

第二の変化は、バーチャルマイクロスコープ

の導入です。この装置は、病理組織診断ならびに細胞診断のガラススライドを短時間でスキャンしデジタルイメージ化します。国立がんセンターとの間で高速LANで接続して病理診断ネットワークを構築し、デジタル化した情報を遠隔診断やコンサルテーションすることが可能になりました。

第三の変化は、自動免疫染色機の導入です。今までは免疫染色ならびに特殊染色はすべて外注で運用し、結果が返ってくるまで1週間以上かかっていました。それが院内で運用することによって、最短で翌日には免疫染色、特殊染色の結果がえられるようになりました。診断の精度とスピードの向上に大きく貢献しています。

第四の変化は、自動染色封入機の導入です。標本の染色から封入まで一貫しておこないますので、標本作成の時間が大幅に短縮されました。夕方4時までに受付をすませた検体は翌日の昼には標本としてできあがります。こうして検査結果の報告がすみやかにこなされるようになりました。

今では、他院であらたに病理検査システムを導入する際には、当院のシステムを見学に来るまでになりました。地域の開業医の皆様もぜひ当院の検査部門を利用いただければ幸いです。



自動免疫染色機



自動染色封入機